

平成23年度

公立大学法人広島市立大学の業務実績に係る評価結果

平成24年8月

広島市公立大学法人評価委員会

公立大学法人広島市立大学 平成 23 年度業務実績に係る評価

全体評価

評価の記号

A：法人の業務は、中期計画の達成に向けて順調に実施されている。

評価コメント

広島市立大学の法人化後 2 回目の年度評価に当たり、全体として見ると、今年度も、中期計画で想定していた以上の優れた成果を挙げたといえる。

今年度の特徴は、芸術学部の教育・研究・社会貢献の各部門での積極的な取組と、平和研究所と国際学部・情報科学部との連携の促進による大学全体の強化である。

また、もう一つの特徴として以下の状況を報告しておくべきであろう。項目別に見ると、広島市立大学による自己評価と評価委員会による評価との相違が目立った。小項目では 40 項目中 9 項目（うち 7 項目は自己評価からの引上げ）、大項目では 9 項目中 5 項目（うち 3 項目は自己評価からの引上げ）である。この相違は、主として評価の視点の違いに由来しており、広島市立大学による自己評価では、中期計画の想定内容を基準にし、実績を正統的に評価しているのに対して、評価委員会での議論は、我が国の大学を取り巻く環境が大きく変動していることに配慮し、昨年度より高い実績を挙げて自己評価を a にしていても、広島市立大学のポテンシャルをもってすれば、そこに安住することなく、より高い目標を掲げるべきと考える項目では B に引き下げ、一方で、最近の多くの大学の動向に照らして、広島市立大学が努力し高い実績を挙げていると思われる項目に対しては、昨年度と同程度の実績で自己評価を b にしていても A に引き上げた。

大項目別に見ると、「教育」関係では、法人化の目玉の一つである全学共通科目の充実と教育環境の整備への取組が更に進み、また、芸術学部の学部及び大学院教育の充実と芸術情報の利用環境の整備、さらには平和研究所の移転計画の前倒しに伴う国際学部との双方の教育内容の強化、そして一方で、今後の布石としての市内中心部におけるキャンパススペースの確保等に大きな前進が見られた。

「学生への支援」と「社会貢献」は、評価委員会が積極的に高評価した項目であり、大項目「教育」中の小項目「特色ある教育」と併せて、大学の新たなブランドの一角を形成することが期待される。

これに対し、「研究」と「国際交流」については、共に昨年度の実績を^{りょうが}凌駕しているにもかかわらず、評価委員会としては、広島市立大学のポテンシャルと広島という地の利に期待して、更なる高みを目指す努力を期待したいという意図を込め、B にとどめた。

法人化のもう一つの目玉であった「業務運営の改善及び効率化」に関しては、初年度で組織体制の整備が完了し、今年度からはその定着を図る段階に

入っている。教員ポストの全学的視野からの戦略的活用体制は機能し始め、また、各学部等における意思決定が、全学的な戦略との調和の下で進められることを意図して導入された「運営調整会議」も順調に運営されている。また、「自己点検及び評価」については、各担当部署の並々ならぬ努力の跡がうかがえ、事実に基づく評価がなされている。広島市立大学の運営体制は大きく変わり、順調に定着してきている。

「財務内容の改善」に関しては、学生の確保、外部資金の獲得その他自己収入の増加に努め、予定どおりの収入を確保する一方、細かい取組を重ねて管理経費の抑制に努力し、大きな成果を挙げている。

以上、広島市立大学は法人化2年目を終了し、学内外の努力により継続的向上の軌道に入りつつあるといえる。今後の力強い成長を期待したい。

組織、業務運営等に関する改善事項等について

組織、業務運営等に関し、特に改善を勧告すべき点はない。